

視察旅行記（アメリカ）

大 淵 彰 三

一

九月十日火曜日、アメリカに渡る日である。十二時すぎタクシーで空港へ行く。ここで子供三人連れた奥さんに会う。御主人と一緒に来る予定のところ、チェコ事件が突発して来られなくなったとか。毎日新聞のロンドン特派員ではさもありなんと思われた。南国の強い太陽で身体を焼かないと、寒いロンドンの冬がこせないということで、飛行機でエストリールに来て今日帰るところに行きあわせた。三人のお兄さんが可愛かったとみえて、一人の外国人が売店からアイスクリームを買い与える、というほほえましい光景をみた。

午後一時五分発のパンアメリカン機が四十分おくられて離陸し

視察旅行記（アメリカ）

た。一五五便で高度一万五百メートル、時速九六〇キロのアナウンサーがあつた。機上では各航空会社とも競争が激しいらしく、サービスに努めていた。

七時間半でニューヨークについたが、滑走路があかず、順番を待って二十五分位空を旋回して漸く着陸した。あとで聞いた話によると、どの飛行機も待たされて内外の問題になっているということだった。羽田然り、各国とも空の過密に悩んでいるようだ。

下りてから入国手続に大分手間どった。行列して二時間近くも待たされただろうか。観光ビザで入国し、そのまま居据わって労働する者がふえているのでそれを警戒し、厳重なようだ。われわれの番がきて簡単に通してくれた。荷物の受取場まで来

ると既に着いている。ふと眼をあげてみると、中二階のガラス越しに林光君夫妻の姿がみえ、手をふっている。車をもつてくるからといって出口で待っていた。奥さんは米国生れの二世であるが、前年同伴で中野宅に来訪され、面識があった。

ホテルは林君に予約して貰ってあったので、同乗して *Adams Victoria* に案内され、カメラなど外出するとき室内におかないように、その他こまごまと注意をうけた。別れて町へ食事に出る。この前泊ったのは偶然にもとなりだったが、町の様子は大分変っていた。

朝食はホテル内のbuffetでとる。九時四十分三菱銀行ニューヨーク支店の平野さんから為替がきているから取りに来るようにとの電話があった。十時頃店につく予定と返事をし、タクシーで出かけた。息子に送金してくれるように頼み、中野の取引先の了解をえてあったのだが、ニューヨーク支店にどうしてヴィクトリアホテルに宿泊しているのが解ったか、今でも納得が行かない。聞いても見なかったが……。というのはニューヨークのホテルは林君に頼んだのだから。車が混んで三十分かかって十分ばかりおくれた。ブロードウェイ一〇番地の十七階に銀行はあった。副長の平野さん、宮崎支店長に会い、中野の支店長の紹介状を出した。暫く話をしたあとで、メキシコオリンピックのメダル三個をもらった。そのあと行員に Wall 街を案内してもらい、ワシントンが誓を述べた建物の前に立って

いるワシントン像をみたり、証券取引所に案内してもらったりした。地下鉄とタクシーで佐藤登君の経営する“Azuma”に行く。五番街の三十六丁目である。十二時の約束が二十分もおくれた。8ミリのバッテリーをたのむ。一緒に出かけ「日本」で天プラを御馳走になる。店にかえって三十四丁目のエムパイヤー・ステート・ビルに登る。昔はハドソン河に突出た数十の棧橋に大小さまざまな船舶が淀泊していたが、昔に比べると少ないようだ。心なしか前回よりもスモッグがひどくなったようだ。かえりはバスで一方通行だから。ロックフェラー広場に立寄る。日の丸がひるがえっているのをみると心強い。五時ホテルにかえり休む。

六時半林君迎えにきてくれる。白門会の年次総会を兼ねて我々夫妻の歓迎会を開いてくれた。参会者合計二十人、夫婦で参会したものも二三あった。中華料理で飲を尽し、中大の近況を述べ、多謝して林君に送られてホテルに帰る。

今日は林君夫妻に案内してもらう日だ。十時出発先ず国連へ、安全保障委員会を傍聴した後、The Room of Quiet で黙禱する。ここの地下でしか売っていない絵はがきと切手を買う。外に出てイーストリバヴァーの河岸で写真をとる。そこから下町 Down Town へまわり、ヒッピー族の溜り場だとか、よっぱらいの町とか、支那人街をまわった。そしてここで各種の焼売で中食をすませた。

林君は学部時代私のゼミに所属し、二十日会の会員でもあり、渡米の際にも些やかな世話をした。殊に大学院に入学する際には英訳して送ったのである。その大学院のマスターコースを四年がかりで卒業したニューヨーク大学を見学した。ブロードウェイを通ってフェリーで対岸のブルックリンに寄る。途中遠ざかるダウントウンとフランスから贈られた「自由の女神像」をみた。北上してイーストリヴァーの橋のたもとにある砦を見学、ここはオランダが最後まで死守し、一七八三年にはイギリス兵が最後に撤退したところという。

イースト川を渡りマンハッタン島を東西に横切り、ハドソン河岸に沿うて北上し、修道院跡の美術館分館を見学した。それからワシントン橋を渡り、ニュージャージー州に入り、途中ダウントウンを遠望し、上流の橋を渡って島にかえる。途中中流階級の上の部の住宅街とか、黒人街を通ってくれた。黒人たちはコンプレックスのために上等の車を乗りまわすと聞いた。

林君は日本鋼管の社員なので、会員組織の「日本倶楽部」で夕食をとった。御馳走するというのを振りきって自分が払った。食後ハドソン河の対岸に渡り、夜景を見物しホテルまで送ってもらふ。明日は堅くことわる。

十三日金曜、今日はワシントン行、荷物を整理して食事に下りる。九時タクシーでラガーディア空港へ行く。国内線用であ

る。十時三十分アメリカンエアラインでワシントンに行く。実時間一時間足らずでナショナル空港に着く。タクシーでホテルワシントンへ、部屋に落つき、九階の食堂に行く。眺望は素晴らしいかったけれど、料理はまずかった。

二時に外の広場に出るとリスが木に登って遊んでいるのを8ミリにとる。ブラブラしていると、観光バスで見物しないかと誘われ、二人分十二ドルを払い、三時に迎えに来るからと附近の博物館に連れて行かれた。見るものは沢山あったけれど、時間が気になって時計の針をみながら見物した。約束だがわず博物館前にマイクロバスがきた。三夫婦である。バスはポトマック河にかかる橋を渡ってアーリントン墓地に向う。故ケネディ大統領の墓に永遠の火がともされ、ロバートケネディとともに暗殺された墓にお祈りを捧げた。頭を廻らせば五万近くの白い墓石が、はるか遠くまで並んでいるのが見渡せた。そのあと無名戦士の墓に参拝し、衛兵交代式を見物し、リンカーンの像を納めた神殿に向かう。リンカーンTempleの階段の下で下車し彼の座像に詣でる。その前から両側に桜並木が見事に繁茂し、噴水のある池を隔ててワシントン記念塔が見通せる。バスはその記念塔の傍で案内終了。順番をまってエレベーターで展望台に上る。ホワイトハウスを遠望する。下りてポトマック河岸に出、見事な桜の木をみる。花時にはさぞかし見事であろうと想像された。鳥も沢山みかけた。翌日荷物をまとめ、九階の食堂

で食事。ポーターに荷物を預け散歩に出る。タクシーで空港へ。十一時二十分発のユナイテッドエアラインでバファローへ、十二時三十分着、タクシーで Park Way Inn につく。十二ドル余もとられた。

部屋に落ちついてから外に出る。オンタリオ湖畔の道路脇の芝生をふんで町へ出る。駅からよりも遠い。前にはなかった展望台ができていて、川に突出しており、行くのに二十五セント宛を払わされた。ここは曾遊の地で、展望台のエレベーターで下におりる。エレベーターの位置が変わっていた。「人魚の霧」号にのる。ダブダブの黒い防水服を着せられる。カナダ側ではシブキの中へ入って何も見えなかった。中の島まで歩いてカナダ側をみ、一休してビールとアイスクリームを買う。

ナイヤガラ瀑布は世界一の水量を誇る。アメリカ側は一六七フィートの切立った上から落ち、一〇六〇フィートの幅がある。カナダ側は馬蹄形をなし、一五八フィートを一とびに落水する。その幅三〇一〇フィート、エリー湖とオンタリオ湖の落差は三二六フィートもある。両湖をつなぐ水路は急流である。帰りは往路と同じ道を草をふんで戻り、夕食は下のレストランでとる。野菜が多くて久しぶりに美味しく食べた。

九月十五日日曜日、荷物をまとめて空港までのバスのあることを確認したが、一人の運ちゃんが安くつれて行くからとい

い、ここで待つようにいって、客を拾いに離れていった。バスが来たけれど乗るなと目くばせする。結局他に二人の客を拾って相乗りで空港へ行く。一一時五分アメリカン航空でシカゴへ、時差の関係で一一時十五分にシカゴ着、実飛行時間約一時間である。バスでターミナルへ、そこからタクシーでホテル・La Salle まで、歩いていけるほどの近さであった。一休して散歩に出る。左手に Merchandise Mart が見え、この中にはないものはないという一大殿堂である。フロントでシカゴの案内記をもらい、日本料理店「ナカノヤ」のことを聞いてでかける。暫く歩いてからタクシーを拾う。中年の運ちゃんラジオで音楽を聞いていた。これは日本製だという。そういえばヨーロッパでもアメリカでもソニーの看板が目についた。"Lake Michigan" に行ってくれという、何を感違いしたか、日本貿易センターにつれていった。ここではない、Lake Michigan だというと、レークミシガン、レークミシガンを連発しながら湖畔に行く。ここままでいいから止めてくれ、との私の言葉に耳もかさず、直ぐ先の「ナカノヤ」の前で車を止める。まだ時間が早いからと前の公園の中に入って時間をつぶす。頃合をみてドアを開けると、開店している。スキヤキである。定価五ドル、ビールを頼んでオードブルつき日本食を満喫した。アメリカ各地でスキヤキを食べたが、肉が柔かく、脂もなくて最高にお美味しかった。チップを合せ二十ドル近く払った。今でも時

時話題になる位だ。アメリカ人は一食五ドル以上の食事をしないということを聞いた。飲物やチップを合わせるとそれ以上になるのだが……。

食後運動場を通り、歩道橋を渡ってミシガン湖畔に出る。家内は静かな水にたわむれ、砂がすごくきれいなものだから少し紙に包んで持帰った。通りに出てタクシーを待ったが、仲々来ない。暫く立坊をしてやっと拾ったが、ホテルは割合近かった。

二

今日は賭博の町ラスベガスへ。九時半タクシーで空港へ行く。O'Hara 空港はターミナルから三六・二キロ離れている。

十一時二十分発のところ十二時出発、時差二時間、飛行時間三時間足らず、十二時五十分ラスベガス着、バスでホテル・フラミンゴへ、沙漠のなかに出現したオアシス、一大歓楽郷がラスヴェガスで、ネヴァダ洲の南部に位置している。ラスヴェガスに近づくにつれて、窓外に沙漠と緑と交錯するのが見える。コロラド河をフリーダムで堰止めて人造湖ミードを作っているのだ。またグランドキャニョンの上もとど。Grand Canyon はアリゾナ州のコロラド河が浸蝕して作った壮大な峡谷である。その最大のものは長さ二一七キロ、幅四キロ乃至一八キロ、深さは三〇〇〇乃至六〇〇〇フィートもある。窓を通して見える

景色は壮観である。ダムでできた人造湖がいくつか緑をたたえていた。

ホテルに二時頃ついたが、フロントに聞くと部屋の準備ができていないから暫く待ってくれということであった。ロビーで関西の某大学の高木夫妻と会った。御主人は会議のため二ヶ月間の出張の帰り、奥さんはここまでお出迎で落合ったということであった。彼も私も交る交るフロントにかけ合ったけれども同じ返事であった。あとで解ったことだが、ここはチェックアウト (check out)——ホテルの客が勘定を支払って出ることをいう)の時間が午後二時でチェックインの時間が四時であった。普通のホテルならアウトが午前十一時か正午とインが三時前後でも文句はなかったが、さすがはギャンブルの町、夜更しの朝寝坊の客のためを凶ったためらしい。裏にプールがあつて泳いでいる。所在なさに木蔭で涼をとりながら辛抱強く待つ。準備が出来たからと部屋に案内されたのは五時前後であつたらうか。部屋の番号は五〇五で、コの字型の客室の右角であつた。

部屋に落ついてからいろいろなバクチ道具を見てまわる。ロビーの続きだから待っている時も来て見たが、部屋がきまらなとと落つかないものだ。絵が三つ揃えばチンジャラジャラとパチンコ玉ならぬお金が出る。そのお金も一〇セントから二五セント、各種の段階がある。両替していくつかを廻してみたが、

みんなバーで、数ドルスツた。もともとギャンブルには弱いし、弱いから興味が無い。もっぱら人のやってるのを見る側にまわる。映画でみるルーレット、車輪のようにまわるもの、カードで賭けるもの、数字合せ式のもの、など様々あった。数字カードを二枚もらい、記入して差出したらあたらなかったが、短時間みた限りでは儲けた者は見当らなかった。札を売ったり、客にサービスをするパニーガールが客の間を歩きまわっていた。スカートは極端に短かく、両股の間スレスレ、決して椅子に腰かけない。かけると間がみえるからだ。

食堂でスパゲッティを頼んだが、挽肉のダンゴが山のようにのっており、挽肉を半分ほども残してしまった。

食後道をへだてた向いのカジノに行ってみる。照明がきれいで、8ミリに収める。その外道路に沿うて大小各種のカジノが並んでいる。疲れたので早々に部屋にかえり、バスに入って床につく。

九月十七日の火曜日、今日はグランドキャニオンに一泊旅行。荷物を預けてバッグだけの軽装で、九時のバスにのり空港へ行く。昨日到着した時に気のついたことだが、空港の通路に赤い絨緞（じゅうたん）が敷かれていて如何にも豪華な雰囲気を出していた。十一時発双発のプロペラ機、中型で三十人位の座席がある。ところどころ空席がある。ジェット機よりも低く

とぶので、地上の景色はよくみえる。半ハゲの山が多い。十一時五十分グランドキャニオン空港につく。如何にもローカル線の空港らしいが、滑走路は広くとつてある。バスで Bright Engel lodge へ行く。山小屋らしくバスもトイレも別にあつた。

ロッジのあるワヴァパイポイントの峡谷の底は海拔二四〇〇フィート、南側の縁の高度は六八八六フィート、コロラド河はるか下に見えるが、目の下四五〇〇フィートほどのところを流れている訳だ。北の縁のところは五八〇〇フィートの下であり、平均の深さ約一〇マイルである。

ここは一五四〇年コロラド探険隊長 Don Lopez de Cardenas によって発見され、一九六八年国立記念物になり、一九一九年国立公園に指定された。

グランドキャニオンは約千百平方哩（二八五〇平方キロ）の広さをもち、三重県のほぼ半分にあたる。長さ五六哩、コロラド河の一〇五哩を含んでいる。コロラド河は大河系の一つで全長一四〇〇哩を超え、アメリカの一二%を灌漑している。

Katibab の吊橋のところで幅三〇〇フィート、深さは一二乃至一五フィートであり、流速一時間一二哩ほどである。

ここでは六ツの気候帯が認められ、メキシコの暑さからサンフランシスコピークスの北極帯アルプスの寒さまでの幅がある。この地方には六〇種の哺乳動物、二五〇種の鳥類、二五種

の爬虫（ハチュウ）類、五種の両生動物が分布している。

ロッジの庭では周りの樹に何種類かの鳥がいて人を恐れず、リスも何匹かチョコチョコしていて、ある外国人がピーナツを一缶売店から買ってきて、ボスのリスに一缶全部与えていた。それを真似て一袋買ってきて家内に渡し、小リスにやっているのを撮影した。名も知らぬ花も咲いていた。

明日午前のドライブに申込む。二人で七ドル。ここでまた高木夫妻に再会したけれど、最終便でラスヴェガスに帰って行った。夕食は中年のウェイトレスに何がおもしろいかを聞いてそれを注文した。割合美味しく食べられたのでチップをはずんだ。夜は暖房がききすぎて窓を開けてねた。冷したり温めたり、一日で身体の方も面喰らったろう。外は秋風を思わせる冷しい風が吹いているのに。寝苦しかった。

十八日水曜日、六時すぎには目がさめた。朝食は行列して席の空くのを待つ。簡単にすませて附近を散策し、小鳥とリスとあそぶ。

九時三十分Hermit's Rest Driveに参入。バスはホテル前から西に向ってHermit Rim roadに沿って進み、Trail Viewではじめてストップ、下車して見物する。横に馬がつかないであって希望者はそれについて峡谷の下の方まで下って見物することが出来る。次はHopi and Pima Pointsであり、四方を見物する。最後にHermit Restでとまる。木製の看板が出てい

た。田舎風のラウンジで休み、ジュースをのむ。見晴しのよいところで、西の端に近い。遙か対岸には向う側の縁から見物する人影が見えた。バスで引返し、十一時三十分ホテル着、十二時までリスや小鳥とあそぶ。二時三十分バスで空港へ、ここで二人の体重を計られた。三時十五分発四時ラスヴェガスへ引返し、バスでホテルへ帰る。荷物を受取り、一二二号室へ案内される。二部屋からなる豪華版だ。

あとでパチンコに似た絵合せのスロットマシンをまわす。絵が二つか三つ揃えばいくら出るが、少々では損するばかり。来たからには損を覚悟であそび、あと食事にする。一回目のシヨウは満員で、二回目のに申込む。Skyroomでビールとおつまみのサーヴィスをうける。バンドがあってダンスもできる。上はキラキラ星が輝いている。もちろん人工だ。十一時行列してシヨウの行なわれる部屋に入る。始まったのは十二時、Catrina ValenteとMickey Rooneyのアクロバット、あとは掛合万才のようだけれど、悲しい哉よく解らない。途中シャンパンとジュースをたのむ。一区切ついたところで勘定する。テーブルチャージとチップを入れて十六ドル。部屋にかえったら午前一時二十分になっていた。

三

十九日木曜日、今日はラスヴェガスを後にしてロスに向かう

日。昨日おそかったから少し寝坊して朝食。八時半荷物をまとめてバスを待つ。合のりの自動車で空港まで、チップだけ高かった。

十一時四十五分発進、RW七六五便で行く。はじめ右と左を間違えて、二機とまっていたものだから人について左ののってしまった。危うくグランドキャニオンに連れて行かれるところだったが、係員に下されて右ののりかえ、十三時二十五分に無事ロスの空港につく。途中ロッキー山脈の南端を越え、雲のかかった山脈を機上から見た。

バスがとまったところが予約してあったビルトモアホテルの裏口、フロントで手続をしたあと十一階の部屋に通される。三時すぎ町へ出て近くの靴屋で家内の靴を買う。案外メイドインジャパンかも知れない。長旅で駄目になったからだ。日本航空の事務所によってスキヤキハウスのニューギンザの場所と、リトルトウキョウに行くバスの系統番号を教わる。

ニュー銀座は気がつかなくて通りすぎ引返す。値段は安かったがシカゴの「ナカノヤ」に比べて味は格段におちた。新調の靴でかかとに靴ずれができ、直してもらう。帰って明日のディズニールンド行を申込む。フリークーポンで二人前二十二ドルを支払う。

二十日金曜日、下の食堂で朝食をとる。グレイプフルーツをデザートにする。九時からホテルの前の道路に出てバスを待

つ。ここは十三年前に留学した時にも見覚えのある建物だ。前が公園のようになって、その公園に休んだことがあり、そこから見える特徴のある左右対照になったホテルに泊ろうとは思ってもみなかった。昔バスでハリウッドに行った際に、帰りにこの脇で下されて自分のホテルに帰ったことを思い出した。

九時二十分バスで出発、七十五もあるフリーウェイ（略してFwy）の一つを通過してディズニールンドへ行く。広い駐車場だから間違わないように車体番号を憶えておく。今でも観光地のバスを離れる時もこの習慣が役に立つ。九州旅行である時バスガイドに車体番号を云ったら、よく覚えていますねといわれた。五時まで自由行動、クーポンを一冊もらってそのクーポンを使って好みの乗物とか、建物に入れる、なくなれば追加してチケットを買えばよい。先ず入口で地図を買う。

二人で五六十年昔の童心にかえって一日あそぶ。入口近くに、バンド演奏を行なっている。そこから馬車にのってほぼ中心に行き、固定してある開拓時代の船にのったり、映画でお馴染みのお城の中に入ったりした。山が出来ていて、その上からGosterにのる。トンネルをくぐったり、滝のそばを通ったり、あつという間に終点につく。後樂園にあるジェットコスターに興味をこらしたものと思えばよい。ロープウェイにのったり、汽車にのったり、ボートにのってお伽の国に吸い込まれる。中では音楽に合わせて各種、各場面の人形が踊ったり、動いたり

している。ボートは流れに沿うて動いているのだ。また潜水艦にのって海底旅行、ガラス窓の外に人工の海底が作ってあるのだ。再び船にのってジャングル旅行。進行に伴って河馬だとかライオンとか様々の動物が出現する間を通ったりする。お化けの国はいろいろな化物が出る仕掛で、気の弱い女の人は悲鳴をあげる。それが恋人同志のカップルでもあったら思わず男の人にしがみつくのだ。

空の世界では轟音（ごうおん）とともに座席がはげしく振動し、宇宙飛行の錯覚をおこさせ、月旅行では星のきらめく中を通過する。外に出ると動物の縫いぐるみを着た人が入場者に愛敬をふりまく。大きな池には昔の汽船——船尾に水車をつけ、蒸気機関でそれを廻転させ、島を一周するのにある。周囲にはいろいろな飾付がしてあり、船の中からインディアン部落なども散見できる。インディアンの部落も作ってあり、その一つは内部に入れるようになっていた。これで大体主なものは見終り、外周を一周する汽車もあったがそれには乗らなかった。

十三年前にも一度きたが、途中道に迷って一時間位しかいなかったけれども、建設早々でこれほど整備されていなかった。要所々に工夫をこらし、子供も大人も厭きさせなくしてあった。宇宙旅行館などは最近できたものようだ。売店で少々のお土産と絵葉書を買ひ、二三枚書いて投函し、五時までにバスにかえり、帰途につき、六時にホテルにかえる。前の公園を散

歩し、附近の食堂で夕食をすませる。

二十一日土曜日、今日はハリウッドの Universal City の見学を申込んでおいたのだ。下で朝食後九時十分バスで出発、途中本部で見学の番号別に並んだバスにのりかえる。十時ここを出発フリーウェイを走ってシティに到着、一度の説明と見学用に用意された部屋などをみてから、見学者用の Glamor Tram にのる。窓のない日覆だけの車が三台連結してある。各種のセット、表面だけの建物、インディアンの部落や西欧風の街路、西部劇用の建物とか村落、時々下車して、giant sound stage とか、スターの化粧室などを見学する。また人造湖、湾、遠くの方に森などがある。現にその森の中でロケをしているとの説明であった。

そのあと Visitor Center を訪れる。入口で人形さながらの二人がいて、一人は不動の姿勢で、一人は人形のように動いている。家内と賭けをして、動かないのは人形だと家内はいう。家内はそれを触りに行ったら生きた人間であった。暫く見てもまばたきもしない。あとで握手をしてくれて8ミリに撮影する。そのあと上海の港とか、屋根から雨がふっているセットとか、池に軍艦が浮んでいて、時をおいてポンと大砲が発射する。同じ池にはその外商船、帆船なども浮んでいた。

ここは高台になっていて、ハリウッドとロスの一部が遠望できた。中食後西部劇格闘の実演と動物のショウがあった。殴り

合いの場面とか、長い鞭（むち）の使い方とか、高いところから飛び下りるとか。約五米の高所からとぶ下には厚い乾草が敷いてあった。そのあと隣の動物のシヨウを見物、インコがピストルの音で死んだ真似をするとか、見物人の中に禿頭の人がいって、カラスが命令でその禿頭にとまると爆笑が起こった。また犬も死んだり、ビッコをひいたり、猫もいろいろな演技をした。ロバが飼ってあって家内が餌をやったら何時までも跡をついてきた。

一同バスで帰える。本日の料金二人で八ドル五〇セント也。髪がのびたのでホテルの地下の理髪室で散髪、きることと後えりをそるだけで三ドル五〇セント、チップ五〇セント。十三年前はたしか一ドル五十セントであった。料金は店に、チップは刈った人に支払うのが西洋流だ。

五時に外出、靴が工合が悪いので直してもらう。二十六系統のバスで日本人街リトウルトウキョウへ食事に行く。ここは十三年前にも来たところだ。格別変ってはいないが少しは奇麗になっている。スシあり、小料理屋あり、何でもあるが、東京会館と称するところで天ぶらを食う。家内はそのうどんが食いたいという。ビールに天プラの追加を頼んで支払は八ドル足らず、それにチップが加わる。リトウルトウキョウといっても小規模で、サンフランシスコのチャイナタウンに比較すると財力に劣るのか、見映えがしない。後者はやたらに飾り立てているけ

れども。バスでかえる。帰ったら手紙がある。読んでみたら日本人のサーヴィス係がいるという案内状、それも月一金曜だけ。明日はここを離れるのだ。

地下で軽食をとり、荷物をまとめて裏口から九時二十分のバスにのり空港へ。一便早くのれたけれど、十一時十五分発五〇便ユナイテッド航空にのり、サンフランシスコ着十二時二十分。バスでターミナルへ。ここでパンアメリカンの九月二十七日八〇一便の確認をとっておく。タクシーでホテルエル・コルテス（El Cortes）、名前から判断すればスペイン系らしい。目と鼻の先で知っていればのらずにすんだのに。もっとも一方通行だから車は遠まわりにはなるけれど。

サンフランシスコは坂道が多いし、大体四角だからどちらから行っても目的地に行ける。前には電車が坂道をノロノロ運転していたけれど、なくなったように思う。ホテルは坂の中途の角にあって、前と横とが見渡せる一二〇三号室、キッチンと冷蔵庫がついていた。

一休みして五時から外出する。地図を頼りにチャイナタウンまで歩く。一度一まわりすると前に泊ったホテルが見付かる。チャイナタウンに向って右側、二三軒手前である。チャイナタウンを端まで歩いて、今夜の食事場所を決める。家内にいわせるとそれほど美味しいことはなかったと。往路とちがった道を通り、下が駐車場で上が公園になっているところで一休み

し、ホテルにかえる。途中の食料品店でビール、ゆで玉子、ハム、ピクルズ、果物などを朝食用に買込み、冷蔵庫にしまいこむ。そして明日のツアを申込む。料金二人で二十三ドル。

二十三日月曜、昨夜の買物で朝食をすます。仲々おいしい。九時三十分下においても人がいない。フロントに聞くとこの先のヒルトンホテルの前だという。そういえば昨夜聞きおとしたのかも知れない。時間におくれあわてて聞いた場所にタクシーを飛ばす。悠々と間に合った。

十時十分出発、フリーウェイを Golden Gate bridge（いわゆる金門湾橋）など、渡り切ったところでストップ、下車して周囲を眺める。それから対岸を北進し、Sausalito を通り、Muir Woods で下車する。ここは大きな Red Wood（アメリカ杉）が生い茂る森の中を散策する。ここに看板が出ていて、アメリカ杉を保護してあるという。最大のものは一千年を経ており、高さ三〇〇フィートの大木である。

またバスにもどり、海岸沿いに Tiburon まで行き、ここの The Dock というレストランで中食、飲物だけ自弁である。そこから San Quentin Point で下車する。ここは刑務所らしくない刑務所、出入口は厳かめしいが、外から見た限りでは比較的自由的な雰囲気を感じられた。門の前の方の監視所には囚人の作品が陳列してあり、即売していた。

Richmond-San Rafael Bridge を渡り、住宅地の中を進む。中流住宅で、サンフランシスコのベッドタウンか？ 池のほとりで休む。池には水鳥があそび、小動物園になっている。

オークランドとバークレーを通り、カリフォルニア大学のキャンパス前でとまり、三十分の休憩、十三年前にもここへ来たことがある。前は夏休中でキャンパスは静かだったが、今回は裸足の大学生あり、ヒッピー風のきたない風体の大学生あり、日本の大学生の方が余程ましな格好をしているようにみえた。

バスの運ちゃんが８ミリをとってやるといって、二人並んで校門から出るところを撮ってくれたし、ノッポの運ちゃんと小柄の家内とが歩いているのを８ミリに収めた。アイスクリームをたべる。そこからバスは San Francisco-Oakland Bay Bridge を渡り、一路帰途へ、この橋は中に一つの島のあるのを利用している。ターミナルで下車、前夜の食料品店で夕食分と朝食分の食料を買いこんで部屋で食べる。部屋で食べるのもアットホームの感じがでて一興である。

翌日九時三十分頃坂を下りて Grayhound の Depot へ行く。グレイハウンドのバスは全米に自動車網をはり回らし、他の交通機関を利用しないでも何処へでも行けるほどだ。この Travel bureau は十時でないとあかない。それまでそこらあた

りで時間をつぶす。二番目位にとびこみ、ヨセミテ国立公園行の切符を買う。ヨセミテへは前払してあった筈だが、というところキャンセルになっているという答であった。よくみるとなるほど九月二十五日が八月二十五日になっている。旅行社のミスだ。更めて切符を買いなおす。サンフランシスコ、—Merced間バス代一人で六ドル八十九セント、ここでのり換えて別のバス、交通費付 Yosemite Lodge Twin Bed の料金、それに二時間のツアを含んで合計六十一ドル六〇セント、もちろん食事付である。明日ここのディポの発車時間八時十五分、出発口は三十六番ゲートであること確かめておく。そのあと市役所前まで歩き、近くの教会で休む。例の店で材料を買い、部屋で中食をすませる。一休みの後は散歩にでる。

二十五日水曜日、部屋で用意した朝食をとり、荷物はフロントに預けて身軽になってホテルを七時すぎ出る。ディポまで十分ほど歩き、ゲート36に行列して八時十五分発のロス行に入る。一番前の席、Modesto に一寸ストップ。トイレに行くためだ。その間快適な道路を快速にとばす。Merced でのりかえ一寸した部落である。ここの食堂で中食をすませる。

Yosemite Transportation の事務所で二ドル追加払をした。一時すぎ出発、草原の中の一本道を進む。周囲に家もみえず、ところどころに木が生えていて放牧の家畜を時々散見する。航

空機でもそう思うけれど、あたりに何も見えないバスで七、八十キロのスピードで何時間も走ると、さすがに広い大陸だなあ、と実感がわく。左折すると岩と緑の多い山道にさしかかる。ロッキー山脈に入ったので緑の色も一層鮮かになる。山の中で一度ストップ、トイレがあり、水道の水が出る。大分時間がかかりそうだ。三時間で国立公園の入口と立札があるところを通り、そこから森林の間の起伏のある道を走る。五時にヨセミテロッジにつく。予定より一時間半もおくれる。大きな樹がところどころに生えているので、もう薄暗い。

フロントでロッジナンバー一〇一のかぎを受取る。独立した山小屋で、ベッドが三ツ、バス・トイレなし。これは申込んだ時からわかっていたが、改めて小屋の中を見廻す。一步出たところに水道はあったが、トイレは少し離れたところに共同のがあった。食堂はセルフサービス、ビールは別室のバーで飲んだ。周囲は杉の大木と高い岩に囲まれている。

暮れなづむ日暮れにうらの森のはずれにあるベンチに腰かけていると、母子の鹿が近づいて家内の与えた餌をたべ、小鹿にも与えたが食べずに行ってしまった。となりの一〇〇号の住人はバスで口をきいたおばさんだった。夜寒くて目がさめ、家内が暖房のバルブをあけると次第に暖くなり、ぐっすり眠った。

翌日六時半に目がさめる。外の水道で顔を洗い、附近を散策する。水の流に名も知らぬ鳥が沢山水をのみにやってきて、人

が近づいても逃げようとしな。隣のおばさんに会ったら、昨夜は寒かったですね、という挨拶だったので、暖房のバルブをあけたら暖かくなったと教えてあげた。あとの祭である。

七時行列して食事をする。何を食べてもタダである。小屋を出て八時三十分バスにのりこむ。平地の台地を五、六ヶ所とま。周囲には奇岩怪石が聳え立っていた。それぞれに名前がついていて、カテドラルのように二本の塔が突っ立っていた岩もあった。家内はバスの中から鹿をみたといったが、私は目に入らなかった。十時二十分ロッジにかえる。

十一時十五分発のバスで帰途につく。Mercedまできたら、連絡できる筈の二時五分のバス発車後三十分以上も経っていた。バスにのる時お昼のお弁当を渡されて車中で昼食をすましたが、バスにのりおくれで処置なし。おばさんに聞いて別のContinental Trailwayで行くことにし、時間をつぶす。四時発グレイハウンドの道よりは少し賑かなところを通る。料金は二人で九ドル五十四セント払う。車中で食事が出る。食費も含まれているのだ。七時終点につく。おばさんと別れて通りに出ると、目の前にヒルトンホテルがみえ、五分ほどでホテルへかえる。食事は車中でしたので、帰りに買ったビールとおつまみで簡単にすます。ついでに朝食の用意もしておく。荷物を受取り、部屋に案内されたら、今度は一二〇一号室。冷蔵庫がないので窓を少しあけておく。

四

二十七日金曜日、今日はハワイにとぶ日である。買ってあったパン、玉子、ソーセージ、牛乳、ピクルズですます。ピクルズというのは四、五センチのキューリの酢漬で、少し甘味が加えてある。

九時昨日の払戻しをうけるためにグレイハウンドのディポールに行く。彼女まだ来ていなくて開くのは十時だという。時間をつぶすうちに九時四十五分扉が開く。真先にとび込んで六ドル十セント払戻しを受ける。一〇時十分ホテルに帰り、チェックアウトする。今度のアメリカ旅行では大体十八ドル、*retail tax* が五%加わって一晩十八ドル九十セントのホテル代であった。例外はワシントンホテルの二十ドル、税を合わせて二十一ドルが最高であったが、料理は最低にまらなかった。*retail tax* というのは、日本でいえば料理飲食税にあたり、免税点は一ドルである。

五分ほど自分で荷物を持ち、ターミナルまで歩く。十一時バスで空港へ、三十分ほどでつく。出発まで一時間半も間があり、その間ブュッフェで中食をすます。ゲート72、十三時十分発、パンアメリカンで、実飛行時間五時間半ほどでホノルルにつく。荷物の受取りにまごついて少し手間どった。バスで送られたが、各ホテルへよって乗客をおろし、ワイキキビルトモア

は最後であった。真珠湾沿いにバスが走る時は、金網ごしに艦艇が見えた。ロスと同じ名のホテルで、多分同じ資本系統であろう。四〇四号室海側ではなかったが、テラスは広く、冷蔵庫あり。近くの店で買物をして入れておく。

Dove（日本より小型の鳩）がテラスに来る。パンのかけらをテラスに置いておくと二、三羽もとんで来て、人の足元まで、時には部屋の中まで入ってくる。海岸に出てパニヤン（Banayan——溶樹）の蔭のベンチで休む。若者は波乗りを楽しんでいる。

二十八日土曜日朝食は昨夜買い込んで冷蔵庫に入れてあったものでテラスですます。荷物をフロントにあずけ、バッグだけで海岸に出て時間を待つ。支払いはダイナースクラブのカードで済ます。出発前国際カードに切替えておいたのだ。

パニヤンの樹陰で一人の日本人の一世と話をする。ハワイ州には人口の四〇％が日系人で、二世はまだしも日本語が出来るが、三世になると英語だけだということ聞いた。

時間が迫ったので話を打ち切り、タクシーで空港へ。国際線の隣合せのハワイアン航空の空港へつく。十一時二十五分発三一二便で出発、途中モロカイ島とマウイ島の飛行場に立寄り、十二時四十分ハワイ島のヒロにつく。マウイ島はいうまでもなく高見山の出身地で七月場所優勝して故郷に錦を飾った。

タクシーでウキラウホテル *Ukela* についたが、割合近かった。食事前に観光業者に捕まって、午後の観光を約束させられた。部屋にバッグをおいて食堂で中食する。食堂の壁にチリ地震で二メートルほどの海水をかぶったと、印がつけてあった。

ヒロはハワイ島の首都、人口二万三千余人余、全島で六万五千人、日系人が四割余を占めるといふ話であった。

二時日系人運ちゃんが迎えにきてくれる。道々日本語で説明して、パニヤンのこと、チリ地震でホテルが二メートルほど海水をかぶったことは前に書いたが、その際流された家があり、そのあとに日本庭園ができて評判がよいということ、蘇鉄は古い植物であること、窓外に見える樹木の説明をして、*Monkey tree*とか、*Money tree*とか、後者は銀行の庭などに植えてあることなど。またウルの木は大木で果物のようなのが実るが、法律で保護されているという。虹の滝は水滴で虹がかかるのでその名がついたらしい。オヒヤの木は岩の割れ目などに生えている。綴りは教わらなかった。

途中日系人の経営する植物園に案内され、各種の花を見学したり、途中で聞いた木や花の名を列挙してみる。

African tree...

Mango...

ハイヴィスカス……市の花に選ばれた。

チャニー……その葉は魚をまいて焼くと香りがある。
チキ……シダの根で作り、魔除けのために庭におく。

カトレア……水がいらずに数日もつ、現に一輪もらって日本
までもってきた

ブルネリア……レイに作る

ハイビー……象の耳、一日だけ咲く

アントリウム……木陰がよい

ベンダー……レイに用いる

ブーゲンビリア……レイに作る

マカデミア……高い木になる実

マハラ……その葉の繊維を用いて織物を作る

Red Finger……ホテルの室内に鉢植になってこれが咲いて
いた

White Ginger……運転手がわざわざ車を止めて道端のホワ

イトジンジャーを切ってくれた

Bird Paradise……鳥の羽をひろげた様なキレイな花

Princess……名を聞いただけで実物はみなかった

オヘロの実……ボケのような小さな実である

グアバンの実……?

植物園から再び車にのり、Kilauea Crater (キラウエア火山)
に向かう。途中海拔一二〇〇メートルの火山ホテルによる。霧
がかかり、雨模様で遠望がきかない。晴れた日にはここから火

山が展望できるということだった。車にもどり火口近くまで行
く。途中に火山観測所があった。この火山は海拔四〇九〇フィ
ート、小雨と霧でさすがに寒い。火口近くまで行き、噴煙をあ
げているのを見る。記念に黒い火山礫(レキ)をもちかえる。
早々にして帰路につき、砂糖黍畑が目に入る。こんな暖いと
ころ(ハワイ島は北緯十九度と二十度との間に位置している。
台湾とほぼ同緯度)でも、刈りとるまでに成長するには一年
半かかるということであった。五時ホテルにかえる。三十二ド
ルとチップ。散歩に出て空港の見えるところまで行く。
食後プールの傍でフラダンスのサーヴィスがあるというの
で、みんなと一緒に見に行った。九時引きあげる。

二十九日日曜日旅行もいよいよ終りに近づいた。九時タクシ
ーで空港へ、歩けるほどの近さだと思ったが案外遠い。九時四
十分発二二二便でヒロを発つ。途中ハワイ島の北西端にある
Kamuela とマウイ島の Kahului の二飛行場により、一〇時五
三分ホノルルへ、国際線とハワイ線とは少し離れていた。日本
航空のフロントで明日のことを再確認しておく。バスでホテル
へかえる。今度はフロントで海に見える側にかえてもらう。四
二五号室。

日記帳がないのに気づき、探したがない。飛行機の中に落し
たかも知れないと思って、手紙に便数とホテルと東京の Adress
を書いて、もし見つかったら送ってもらうように頼んでおく。

事務所は Kalakaua Avenue 2270 にあってその手紙を届けておいた。その手前に日航の事務所もあった。日記帳はバッグのポケットに入れておいたのだが、ハワイ航空の空港と国際線とが離れていて、その間歩いたものだから、その時に落したかも知れない。後日ハワイ航空から見付からなかったとの返事があった。

そこから引返し、海岸に出、家内は靴をぬいで海水に足を浸す。それから十三年前に泊った Kaimana ホテルを見に行く。椰子の木の繁る木の下道をダイヤモンドヘッドの方に向けて歩く。当時とは面目を一新し、高層ホテルになっていた。フロントに入り、顔見知りの主人がいたら挨拶しようと思ったが、なかに居なかったし時間もおそくなるので失礼した。途中雲間に沈む太陽の光が夕焼に染まって印象的だった。暗くなった道をホテルの方へ、途中例の店でドーナツ、ピクルズ、ビール、ソーセージ、果物としてパイヤを買い、ヴェランダで夕食。暗くなっても海で泳ぐ人がたえない。

九月三十日月曜日、今日は二ヶ月間の旅行の外国での最終日、明後日は久しぶりで日本の土を踏むのだ。明日は飛行機の中で日付変更線を通るので、二時間もない位だ。家内は折角和服をもってきたので着ることにする。現地の人は馴れているとみえて見向きもしない。十時日航から都合で一便早めてほしいという電話があった。次の便で帰国する予定になっているの

で、留守宅にその旨連絡して出迎人に迷惑のかからぬようにとの条件つきで承諾する。

一寸散歩に出て買物をする。何も珍らしいものなし。

十一時三十分タクシーで空港へ、運ちゃんは日系人で日本語で話してくれる。空港で中食をとる。

十三時十五分発〇五〇便日航機、十五ゲートからの乗り込み、羽田に向けてとび発つ。高度九五〇〇メートル、時速八四〇キロのアナウンスがあった。

七時間半の飛行で四時半羽田着、機内で日付変更線通過の機長サインの証明書をもらう。通関手続三十分でロビーへ。出迎人は吉祥寺の義姉、義妹の富士子、雅、寛、旅行社の柏崎、大学関係では林君、亀山君、大学院生の岩田君、片山君、沢君、西江君の諸君であった。岩崎君釘本君も来た由であるが、時間が早まったのと、それが徹底していなかったとのことで折角出迎えてくれたのに会えなかった。

諸君の労をねぎらうためと、事故にも会わず無事に帰国したことを祝って、二階のラウンジでビールで乾杯し、家路についた。

十月一日の暗くなった頃である。

五

最後に結びとして十三年間の物価の比較をしてみよう。土壇

場になって記載してある日記帳をおとし、ドルを各空港のバンクで換金したことが記憶にないが、現時点（一九七二年八月）では間もなく一〇〇〇ドルまでは各自好みのものを輸入出来ることが新聞に出ていた。我々の場合は商売柄「経済視察」の名目で二千ドル、家内はただの観光ビザで五百ドル、それに旅行社の担当者の名義で三百ドル、あとでニューヨーク支店宛に送った五百ドル、合せて三千三百ドル、航空運賃一人前五十八万六千余円、その他パスポート代、注射代とも旅行業者に支払った金額二人で百二十二万五千円位、スーツケースその他旅行具は別である。コダックのフィルム、写真機、8ミリ、編集機など、教え子の関係とか親戚とかで市価より安く手に入った。また旅行後現像その他もこれに含まない。

旅行の実費は大体平均して二人で一日四十ドル、六十日として二千四百ドルは使わなかった。千ドル位余ったからである。特別けちった訳ではないけれど、老人になって、竹内先生のパリー便りにあったように——竹内先生夫妻は一九七二年春に欧米旅行をされた——胃が縮少して御馳走も多くうけつけなかったのが原因である。ヨーロッパではイタリー、スペインが比較的安く、アメリカが一番高かった。

十三年前留学の時はフランス国内を旅行するとき七、八百フラン以上（もっともシングルであるが）は出さなかった。今回はパリーだけしか泊らなかったが、ダブルでも六十五フラン、一

フランは六十五円（円切上げ前）、換算して三千五六百円、朝食付で安い方であった。イタリーのリラは百円につき五十八リラ、一万リラをこえても六千円前後、スペインのペセタは五円余、食堂での食事代を含んでいるので、宿泊料だけは算出できない。領収証が手許にないから。ところでアメリカはどうか。前回は高いところでも八ドル、十ドルで泊まれたのに今回は二流どころで十八ドル九〇セント（税込）、ワシントンが一番高くて二十ドル、前回に比較して二倍にはなっていたと思う。一事が万事、他は推して知るべしである。八ドルはシカゴとロス、十ドルはハワイであった。前述したように佐藤君は八ドルでも高いといつて、ダウンタウンのホテルで四ドルで泊った。新保氏と広沢幸子さんと連絡がついて四五泊し、宿賃が浮いたのだけ。

帰国してから8ミリを現像し、編集して時々写して画面を見ながらその場景を思い出すのである。日記帳は紛失したけれど、パンフレットとか8ミリの写真をみ、家内のメモを参照し、それに場所によっては辞書を参照してこの旅行記を書き終えたのである。